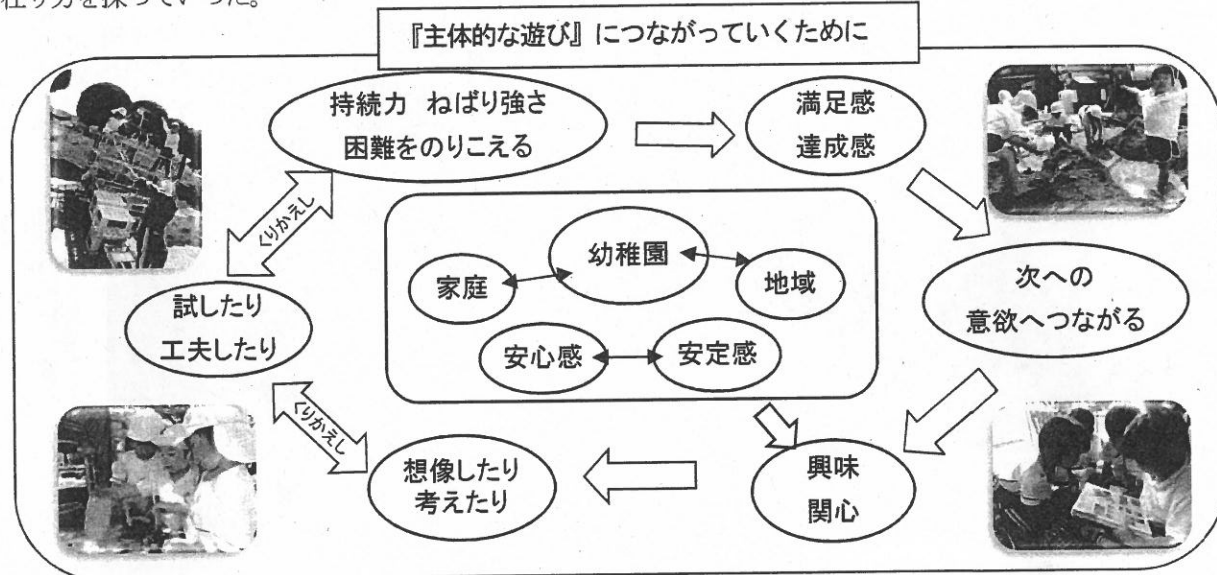


〔研究主題〕 『やってみよう』から『主体的な遊び』へとつながる保育をめざして
～ 心が動く、体が動く子どもを育てる ～

教育目標を「豊かな感性を育み、主体的に生きる力の基礎を培う」とし、主体性の発達を「やってみよう」「やってみよう」「やり遂げる」と捉え、それぞれの年齢から読み取っていきながら子ども達の思いが「主体的な遊び」につながっていくための保育の在り方を探っていきたく考えた。そこで、研究主題を上記のように設定し「やってみよう」と思ったことを、子ども自らが周囲の環境に働き掛け、試行錯誤を繰り返す中で、どのようにすれば「主体的な遊び」へとつながっていくのか、保育者の意図やねらいを照らし合わせながら、環境構成や援助の在り方を探っていった。



保育者の援助

- ・信頼関係を築き、安心感や安定感をもてるようにする。
- ・一人一人の発達や内面を理解し、子どもの気持ちや思いを受け止める。
- ・一緒に遊びを楽しむ。
- ・子どもにとってのモデルとなる。
- ・子ども自身が気付いたり、考えたりする姿を大切に、子ども達の育ちや学びへとつなげられるようにする。
- ・友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じたり、友達のよさに気付いたりできる場をつくる。
- ・保育者間で共通理解し、連携を図りながら、子ども達にかかわる。

環境構成

- ・安心して過ごせる空間をつくる。
- ・興味や関心をもってかかわりたくなるような教材や素材、道具を準備する。
- ・季節や子どもの発達に応じた教材を準備する。
- ・遊びに見通しをもちながら環境構成をする。
- ・じっくり考えたり、試したりできる時間や場を確保する。
- ・次の意欲へとつながるような環境の再構成をする。

各学年の主体性の発達について・・・

- 3歳児 …… 一人一人が、安心していろいろな環境に出会い、かかわってみようとする
『やってみよう』
- 4歳児 …… 保育者や友達とのかかわりの中で葛藤を経験しながら、自分を十分に発揮する
『やってみよう → やってみよう』
- 5歳児 …… 友達と力を合わせて活動する中で、友達関係が深まり学び合えるようになってくる
『やってみよう → やってみよう → やり遂げる』

1. 研究主題

ふり返りの共有化と「学級づくり」「授業づくり」

丸亀市立飯山北小学校 原田 晃輔

2. 研究の具体と今後の課題

昨年度の研究では、平成 29 年告示の新しい学習指導要領を見据えて身体知(運動のコツ)の習得から運動技能の習熟へとつなぐ体育授業を構想し実践した。運動を通して共通体験した身体知は、言語として創発されることで学級・学年内で共有化され、運動技能の習熟へとつながった。

まず教材を工夫し、子どもが夢中になって関わりたくなる場面を作る。その授業のふり返りで、活動の成果と反省を基に次の活動の見通しを書かせ、その中から教師が意図的に選抜したものを示し、共有化を図ることで、子どもの主体的な学習活動を引き出すことができた。

今年度は身体知と知識との関係を探るために、予め運動に対する知識や練習方法を示し、その知識と自らの身体知をつなぐために、友達と交流しながら練習を進めていく学習と、知識のない状態から友達の様子を互いに観察し合うことで身体知を共有化し、知識へと高めていく学習の両方を実践した。また、体育で行ったふり返りの仕方を学級活動など全教科に広げ、体育以外の授業での効果について考察した。

1. 研究主題

小学校における特別支援教育コーディネーターの役割と機能の在り方について

高松市立屋島西小学校 中村 翼

2. 研究の具体と今後の課題

- ・本校の現状と特別支援教育体制について整理し、来年度に向けて本校に合った特別支援教育コーディネーターによる支援体制について検討することを目的とする。
- ・3人の特別支援教育コーディネーターを対象に質問紙調査を行い、特別支援教育コーディネーター自身の悩みを解決するためにどのようなことを必要と感じているのかを明らかにした。
- ・「保護者の理解」「コーディネーターの多忙さ」「校内支援体制の難しさ」「役割分担の難しさ」「支援の必要な児童の増加」「連携の難しさ」などといった課題が見いだされた。
- ・校内支援体制を整備する上で、「コーディネーターを専任とする」「学校全体に関わる立場の教職員がなる」ことなどコーディネーターとしての活動時間を確保するための仕組みや校内における立場や職務を明確にするなどの検討が必要である。あわせて、どの教員にとっても相談しやすい職員内の雰囲気づくりに努めていくことが大切であると考えた。

1. 研究主題

特別支援学校小学部における小集団SSTの取り組み

香川県立香川東部養護学校 住田 伸英

2. 研究の具体と今後の課題

- ・知的障害特別支援学校小学部の児童に対して、友達とのかかわりや気持ちの落ち着かせ方など学校生活に必要な社会スキルを知り、適切に活用する方法を学ぶことを目的に、ソーシャルスキルトレーニング(SST)を用いた授業を実施し、その効果を検討した。
- ・4年、5年児童のうち他者とのかかわりにおいて困難さのみられる児童4名で小集団を構成し、すごろくゲームやロールプレイを取り入れた活動を行った。
- ・効果の評定は、SST尺度を用いて単元実施事前・事後の評定を実施し、児童2名の変容を比較した。
- ・評価の結果から、数字を数えて気持ちを落ち着ける、場面に合わせた挨拶などのパターン化した社会スキルやコミュニケーションスキルの獲得について、効果が見られた。
- ・今後の課題として学習で獲得した社会スキルを生活の中で活用する場面の検討が必要である。